

## 2018 年度大学入試センター試験 解説〈日本史B〉

### 第1問 地域とその歴史的文化的財

第1問は、2016年度では大学生の日記、2017年度では大学生の手紙という形式で問題文が構成されたが、今年度は2015年度まで頻出していた会話文形式の出題が復活した。

問1  正解は①。

- X 正文。(注4)の「寺:役所(朝廷)」,(注5)の「吾:『乎獲居の臣』のこと」,(注6):「左治し:統治を助け」,をよく見て設問文を読めば,「『獲加多支鹵の大王』の役所(朝廷)が『斯鬼の宮』にある時,『乎獲居の臣』は,大王が天下を治めることを助けた」が正文だと判断できる。
- Y 正文。「獲加多支鹵の大王」について,以下で確認してほしい。

#### 【整理】ワカタケル大王・倭王武・雄略天皇

熊本県の江田船山古墳出土の鉄刀には,75文字の銘文が刻まれている。銘文の一部にある「獲□□□鹵大王」は,かつては反正天皇とみる説が有力だった。

しかし,埼玉県の稲荷山古墳から出土した鉄剣に,「獲加多支鹵大王」と刻まれた銘文があることが1978年に確認されると,江田船山古墳出土の鉄刀銘にある「獲□□□鹵大王」と同一人物と考える見方が強まった。

今日では,この鉄刀と鉄剣に刻まれた文字は,ともに「ワカタケル」と読み,『日本書紀』に「大泊瀬幼武天皇」と記されている雄略天皇とされる。2つの遺物から同一の人物名が発見されたことは,5世紀後半に九州中部から関東地方まで,ヤマト政権がその支配を広げていたとする根拠となった。また,それは「東は毛人を征すること五十五国,西は衆夷を服すること六十六国……」とする,ヤマト政権の勢力範囲に関する倭王武の上表文の記事を裏づけることにもなった。

問2  正解は③。

- ③ 正文。Ⅲの近世の検地の様子を描いた検地仕法からは「御奉行」とされている人物,「御役人」や「村役人」とされている人物が確認できる。
- ① 誤文。「条坊制」を「条里制」とすれば正文になる。古代の図であるⅠの「東大寺領糞置荘開田図」からは,条里制にもとづいて,碁盤の目状に区画された土地が確認

- できる（「<sup>くそおきのしょう</sup>糞置荘」は8世紀に成立した初期荘園）。耕地の区画法である条里制と、平城京や平安京など宮都の区画法である<sup>じょうぼうせい</sup>条坊制を区別しておこう。
- ② IIは、中世（鎌倉時代）において、荘園領主と地頭のあいだでの合意を経て描かれた<sup>したじちゅうぶん</sup>下地中分図（「荘園領主同士が和解」は誤り）。地頭との所領紛争が激化すると、荘園領主は地頭に荘園管理を一任するかわりに一定額の年貢進納を請け負わせ、年貢確保をはかった（<sup>じとうけ</sup>地頭請）。また、所領を折半して互いに侵犯しないようにする下地中分をとることもあった。下地中分には、地頭と荘園領主の和解契約による<sup>わよ</sup>和与中分のほか、幕府の裁決に基づく強制的な中分があった。本問で用いられた<sup>ほうき</sup>伯耆国（現在の鳥取県）<sup>とうごうのしょう</sup>東郷荘の下地中分図には、当時の執権と連署の花押（かおう）（署名の代わりにのサイン）が記されている。
- ④ IVは近代（明治時代）の<sup>ちそかいせい</sup>地租改正事業に際して発行された<sup>ちけん</sup>地券。地租改正では、課税基準が<sup>とくほく</sup>収穫高から地価へと変更され、地券にも土地所有者・土地面積のほか、地価が記された（「収穫高」は誤り）。

問3 3 正解は③。

- a 誤文。「女性」を「男性」とすれば正文になる。平安時代の貴族社会では、男性の正装は<sup>そくたい</sup>束帯やそれを簡略にした<sup>いかん</sup>衣冠、女性の正装は<sup>にようほうしょうぞく</sup>女房装束（<sup>じゅう に ひとえ</sup>十二単）だった。これらは唐風の服装を和風に改めたもので、文様や配色などに日本風の趣向がこらされた。
- b 正文。袖口の狭い<sup>せうそで</sup>小袖は、戦国・安土桃山時代にかけて、庶民の一般的な衣服として定着した。
- c 正文。<sup>ゆうぜんぞめ</sup>友禅染は、江戸時代の<sup>みやざきゆうぜん</sup>元禄文化期の絵師である宮崎友禅が創始したとされる<sup>そめもの</sup>染物。
- d 誤文。「モボとよばれる男性が<sup>かつぼ</sup>繁華街を闊歩した」のは、大正時代末期から昭和初期（「明治時代」は誤り）。開放的で享樂的な若い女性はモガ（モダンガール）、男性はモボ（モダンボーイ）と呼ばれた。モガは断髪にスカート、モボは<sup>やまたかぼう</sup>山高帽にステッキといういでたちで、洋風化・近代化の進んだ都市生活を<sup>おうか</sup>謳歌した。

問4 4 正解は①。

- ア <sup>ふこくきやうへい</sup>富国強兵は明治政府の国家目標の一つで、富国とは資本主義により経済力を養成すること、強兵とは<sup>こくみんかいへい</sup>国民皆兵主義による軍事力の強大化などを意味する。欧米諸国によるアジアの諸地域への圧力が強まるなかで、明治政府は独立の維持を最大の課題とせざるを得ず、そのためには経済力と軍事力の強化が不可欠だった。
- <sup>みんりよくきゆうよう</sup>民力休養は、1890年の帝国議会開設後、民党が掲げたスローガン。1890年に開

設された第一議会では、<sup>ちょうぜんしゅぎ</sup>超然主義の立場をとる政府（第1次山県有朋内閣）と「民力  
休養・政費節減」を主張する民党とが予算問題などで対立した。

イ <sup>しらかわ</sup>白河上皇をはじめ、院政期の上皇は仏教をあつく信仰し、出家して法皇となり、<sup>ろく</sup>六  
<sup>しょうじ</sup>勝寺など多くの寺院を建立し、紀伊の<sup>くまのもうで</sup>熊野詣や<sup>こうやもうで</sup>高野詣を繰り返した。それらの費用  
調達のために<sup>じょうごう</sup>成功などの売位・売官の風がさかんになった。

伊勢詣（伊勢参り）は室町時代から民衆の間で広まった伊勢神宮への参詣のこと。  
江戸時代には、<sup>おかげ</sup>御蔭参りと呼ばれる、庶民が伊勢神宮へ集団で参詣した現象が起こった。

問5  正解は③。

- ③ <sup>さんさいいち</sup>鎌倉時代の定期市は、月に3回開かれる三斎市が一般的だったが、貨幣経済の発達  
にともない、市日の回数は増加して、応仁の乱後には、月6回開かれる六斎市が一般  
化した（「市場の市日が減少」は誤り）。また、常設店舗の<sup>みせだな</sup>見世棚が、都市の京都・奈良・  
鎌倉でみられるようになった（「地方で見世棚が普及」も誤り）。
- ① 平安時代において、遣唐使の廃止後は、中国との正式な国交は途絶えたが、こうし  
たアジア情勢のなかで、私貿易が行われた。たとえば宋の商船が来航すると、朝廷は  
<sup>からものつかい</sup>唐物使という使者を大宰府に派遣し、一般人の商売に先立って商船の荷を検閲し、  
必要な文物を選定・購入した。<sup>からもの</sup>唐物とは、陶磁器、書籍、絹織物、薬品類、香料、染料、  
絵の具・紙墨など文具類といった、中国から輸入された文物の総称で、これらは貴族  
らに珍重された。
- ② 商品取引が遠隔地間でもおこなわれるなかで、馬の背に荷物を載せて運搬した輸送  
業者である<sup>ばしゃく</sup>馬借、年貢の保管・輸送を担い、のちに問屋に発展する<sup>とい</sup>問（<sup>といまる</sup>問丸）などが  
活躍し、代金決済の手段として<sup>かわし</sup>為替の使用も活発になった。
- ④ 豊臣秀吉が断行した朝鮮出兵の際、出兵した大名らによって連行された朝鮮人陶工  
らによって、近世初期には西日本各地で陶磁器生産が始まった。特に<sup>ありたやき</sup>肥前の有田焼は、  
長崎貿易の輸出品となり、海外へ輸出された。

問6  正解は②。

X 写真は、<sup>からふと</sup>北緯50度線（→ a、<sup>ひょうせき</sup>樺太の北緯50度線）の境界標石。日露戦争に勝利し  
た日本は、1905年のポーツマス条約によって、ロシアから<sup>からふと</sup>南樺太（北緯50度以南の  
樺太）を割譲された。

b 1938年の<sup>ちょうこほう</sup>張鼓峰事件（関東軍とソ連軍との間でおこった軍事衝突事件）で知  
られる張鼓峰付近だと考えられる。

Y 「関東州の管轄と南満州鉄道株式会社の保護・監督にあたる機関」は、旅順（→ d）  
に置かれた<sup>かんとうととくふ</sup>関東都督府。ポーツマス条約では、ロシアは、清国からの<sup>そ</sup>旅順・大連の租

借権<sup>しゃくけん</sup>、長春<sup>ちやうしゆん</sup>以南の鉄道とその付属の利権を日本に譲渡した。これをうけ、日本は翌1906年に、(1)旅順・大連など遼東半島の南部（関東州）の軍事・行政を管轄するために関東都督府を旅順に設置する、(2)旧東清鉄道（南満州鉄道）などの経営を進めるために半官半民の国策会社である南満州鉄道株式会社（満鉄）を大連に設立する、といった措置をとった。

c 奉天<sup>ほうてん</sup>付近だと考えられる。奉天付近の柳条湖<sup>りゅうじょうこ</sup>では、1931年に満州事変の契機となる柳条湖事件が起こった。

## 第2問 原始・古代の国家・社会と音楽との関係

本問の問題文でテーマの1つとされている「音楽」は、全国統一高校生テスト第1問でテーマとして取り上げていた。

第2問では、2015年度までは鹿子木<sup>かのこぎのしやう</sup>荘の史料（2015年度）・「魏志」倭人伝（2014年度）・『宋書』倭国伝（2013年度）というように基本史料の引用が定番となっていた。昨年度は史料の出題がみられなかったが、今年度は多くの受験生にとって初見となる大仏開眼供養会の史料（『続日本紀』）が問5で引用された。

問1  正解は③。

ア 日本には、弥生時代に青銅器と鉄器がほぼ同時に伝来した。鉄器は鉄製工具や農具として広まり、農業生産力の向上に貢献しただけでなく、武器としても用いられた。一方、青銅器は祭器としての性格を強めていった。青銅器には、武器として朝鮮半島から伝来した銅矛<sup>どうぼこ</sup>・銅戈<sup>どうか</sup>・銅劍<sup>どうたく</sup>、また朝鮮半島の鈴に起源をもつ銅鐸<sup>どうたく</sup>などがある。青銅器については、近畿地方の銅鐸、瀬戸内海沿岸の平形銅劍<sup>ひらがた</sup>、九州北部の銅矛・銅戈、をそれぞれの分布圏とする見方が一般的だった。しかし、1980年代から90年代にかけての島根県の荒神谷遺跡<sup>こうしんだに</sup>（神庭荒神谷遺跡、銅劍358本・銅鐸6個・銅矛16本が出土）や加茂岩倉遺跡<sup>かもいわくら</sup>（銅鐸39個が出土）の発掘調査などから、従来の青銅器分布の考え方に問題が提起された。

イ 712年に成立した『古事記』の編纂事情は、『古事記』序文から知られる。それによれば、天皇家の系譜やその事績などを記した『帝紀』や、神話や伝説をまとめた『本辞』（『旧辞』のこと）を天武天皇が稗田阿礼<sup>ひえだのあれ</sup>に誦み習わせたが完成せず、のち元明天皇の詔をうけた太安万侶<sup>おおのやすまる</sup>（安麻呂）がこれらを筆録して成立したという。

淡海三船<sup>おうみのみふね</sup>は、石上宅嗣<sup>いそのかみのやかつぐ</sup>とともに8世紀の天平文化期<sup>てんぴやう</sup>に活躍した漢詩文の文人。

問2 8 正解は③。

- ③ ヤマト政権のもとでは、豪族たちは血縁関係をもとに構成された<sup>うじ</sup>氏と呼ばれる組織に編成され、氏を単位としてヤマト政権の職務を分担した。
- ① 3世紀中頃から後半にかけて、近畿や西日本各地に大規模な古墳が出現した。これらはいずれも<sup>ぜんほうこうえんぶん</sup>前方後円墳や<sup>ぜんほうこうほうぶん</sup>前方後方墳で、埋葬施設の構造・副葬品などの点でも画一的な性格をもっていた。巨大な古墳はとくに奈良盆地に多くつくられたことから、この時期に大和の首長たちを中心とする広範囲の政治連合であるヤマト政権が成立したと考えられている（「前方後円墳の築造が禁止された」は誤り）。
- ② 「屯倉」を「田荘」とすれば正文になる。ヤマト政権のもとで、豪族の私有地は<sup>たどころ</sup>田荘と呼ばれ、豪族の私有民である<sup>かきべ</sup>部曲や<sup>ぬひ</sup>奴婢などが耕作した。<sup>みやげ</sup>屯倉はヤマト政権の直轄地。ヤマト政権は各地を勢力下において地方豪族を国造に任じ、国造の国内に屯倉を設置していった。
- ④ 豪族は、大王のもとにその子女を<sup>とねり</sup>舍人・<sup>うねめ</sup>采女として出仕させた（「公奴婢」は誤り）。律令制下の身分は、<sup>りょうみん</sup>良民と<sup>せんみん</sup>賤民に大別された。賤民とされた<sup>かんこ</sup>官戸・<sup>りょうこ</sup>陵戸・<sup>くぬひ</sup>公奴婢・<sup>けいん</sup>家人・<sup>しぬひ</sup>私奴婢を<sup>ごしきのせん</sup>五色の賤という。

問3 9 正解は⑥。

- Ⅲ 「倭の兵が、好太王（広開土王）に率いられた高句麗の軍隊と交戦した」のは、4世紀末～5世紀初頭。  
中国吉林省に現存する<sup>こうたいおうひ</sup>好太王碑の碑文には、391年より倭が朝鮮半島に出兵してきたことや、<sup>こうくり</sup>高句麗の好太王の軍が倭と交戦し、倭の兵を撃退したことが記されている。
- Ⅱ 「倭の五王が中国へ朝貢した」のは、5世紀。  
倭の五王（<sup>さん</sup>讃・<sup>ちん</sup>珍・<sup>せい</sup>濟・<sup>こう</sup>興・<sup>ぶ</sup>武）は、5世紀はじめから約1世紀の間に相次いで中国の南朝に使節を派遣した。たとえば『宋書』倭国伝には、「興死して弟武立つ。自ら<sup>しじせつとく</sup>使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大將軍倭国王と称す」とあり、478年に倭王武（雄略天皇，第1問・問1－Y）が上表文を送ったことが記されている。
- I 「筑紫国造磐井が、大規模な反乱を起こした」のは、6世紀前半。  
6世紀には、地方豪族のヤマト政権の支配に対する抵抗がたびたびみられた。527年、<sup>けいたい</sup>継体天皇は<sup>おうみのけぬ</sup>近江毛野を統率者とした<sup>しんろ</sup>新羅征討軍を朝鮮半島に派兵しようとした。しかし、<sup>わいろ</sup>新羅から賄賂を手にした<sup>つくしのくにのみやつこいわい</sup>筑紫国造磐井は、これを阻止するために527年に反乱を起こした（磐井の乱）。磐井の乱は、大王の軍によって、翌年によりやく鎮圧された。ヤマト政権はそののち、現地に大王家の直轄地にあたる屯倉を設定することで支配領域を拡張させていった。

問4 10 正解は②。

- ② 「大学」を「国学」とすれば正文になる。律令制では官人養成のための教育機関として中央に<sup>だいがく</sup>大学がおかれたが、地方には国司の管理下に<sup>こくがく</sup>国学が設置された（「大学には、郡司の子弟が多く入学した」は誤り）。国学では主として郡司の子弟が学んだが、成績優秀者は大学に進み、官人として出世する道も開かれていた。
- ① 律令国家の政治は、適任者がいなければ空席となることから「<sup>そっけつ かん</sup>則闕の官」とよばれた<sup>だじょうだいじん</sup>太政大臣のほか、<sup>ひだり</sup>左大臣・<sup>みぎ</sup>右大臣・<sup>おほなご</sup>大納言といった<sup>くぎやう</sup>公卿を中心に運営された。
- ③ 律令官制では、五位以上の貴族の子、三位以上の子・孫には、21歳になると父（祖父）の位階に応じて一定の位階が与えられた（<sup>おんい</sup>蔭位の制）。官人は位階に応じた官職に任じられたため（<sup>かんい そうとうせい</sup>官位相当制）、上級官人の世襲化が進んだ。
- ④ 律令制下の諸官庁に属する幹部職員は、<sup>かみ</sup>長官・<sup>すけ</sup>次官・<sup>じょう</sup>判官・<sup>さかん</sup>主典の<sup>しどうかん</sup>四等官にわけられた。次の【参考】四等官制のように、各官庁で用字が異なることも知っておこう。

【参考】 四等官制

	長官	次官	判官	主典
国司	<sup>かみ</sup> 守	<sup>すけ</sup> 介	<sup>じょう</sup> 掾	<sup>さかん</sup> 目
郡司	<sup>だいらやう</sup> 大領	<sup>しょうりやう</sup> 少領	<sup>しゅせい</sup> 主政	<sup>しちやう</sup> 主帳
大宰府	<sup>そち</sup> 帥	<sup>に</sup> 式	<sup>げん</sup> 監	<sup>てん</sup> 典
八省	<sup>かみ</sup> 卿	<sup>すけ</sup> 輔	<sup>じょう</sup> 丞	<sup>さかん</sup> 録

問5 11 正解は①。

752年の<sup>だいぶつかいげんくやうえ</sup>大仏開眼供養会の史料（『<sup>しよくにほんぎ</sup>続日本紀』）。

X 正文。聖武天皇は、鎮護国家の思想によって国家の安定を図ろうとし、741年に国分寺建立の詔を恭仁京で出した。さらに、聖武天皇は743年に<sup>しがらきのみや</sup>紫香楽宮で大仏造立の詔を出して<sup>るしやな</sup>金銅の盧舎那仏の造立を開始し、平城京に戻ったのち、奈良で造立を再開した。大仏造立は<sup>ぎやうき</sup>行基など民間の力も利用して推し進められ、752年、<sup>こうけん</sup>孝謙天皇のもとで、大仏開眼供養会が盛大に行なわれた。

こうした情報をもっていれば「国家的事業として大仏開眼供養会を行った」は正しいと判断できるだろう。また、前半の「天皇が多くのお人を引き連れ」は、「<sup>みづか</sup>天皇親ら文武の百官を率ゐて」から、正しいと判断できる。

Y 正文。「<sup>ことごと</sup>雅楽寮と諸寺との種々の音楽、並に<sup>また</sup>成く来り集る。復、王臣諸氏の<sup>こせち</sup>五節・<sup>くめまい</sup>久米舞・<sup>たてふし</sup>楯伏・<sup>とうか</sup>蹋歌・<sup>ほうこ</sup>抱袴等の<sup>かぶ</sup>歌舞有り」と、注の「<sup>こせち</sup>五節・久米舞・楯伏：日本古来の歌舞の種類」、<sup>たてふし</sup>蹋歌・抱袴：外来の歌舞の種類から、「<sup>こせち</sup>国内外の多彩な音楽・歌舞によって、儀式の盛大さが演出された」は正文だと判断できる。

問6 12 正解は④。

X 戸籍・計帳の作成により民衆を把握して班田を行い、調・庸などの人頭税を中心とした税を民衆に負担させるのが、律令的支配の原則だった。しかし、浮浪・逃亡・偽籍が増加するなかで、しだいに民衆の把握は困難になった。10世紀の初頭には醍醐天皇が班田の励行をはかるなど、律令的支配の再建をめざす動きもあったが、以後は戸籍・計帳の制度も崩れて班田収授の実施も不可能となった。

やがて政府は従来の戸籍・計帳にもとづく調・庸などの人頭税に代わり、有力農民に田地の耕作を請け負わせ、面積に応じて官物や臨時雑役といった税を課すようになった。課税単位となった田地は名、名を耕作し租税を納める有力農民は、10世紀には田堵(負名, →b)と呼ばれた。したがって、負名体制についての説明であるため、「徴税単位にわけられた田地の納税を請け負った」は正しい。

a 検田使は、国司によって租税のかかる輪租田に派遣された、土地や徴税負担に関する調査を担った役人。

Y 知行国の制度について説明した文。知行国の制度は、皇族や上級貴族らを知行国主(→d)に任命して、その国の国守(国司の長官)の人選権と収益の大半を与える制度。知行国主は、子弟や近親者を国守に任命し、現地には目代を派遣して一国の支配を担当させた。知行国は院政を行う上皇や平氏政権の経済的基盤となった。

c 預所は、荘官の名称の1つ。土地を寄進した開発領主らは荘官となり、現地での実質的な支配を進めた。荘官は荘園を現地で管理する下司・公文などの総称で、これら荘官は、現地の開発領主が任命されることが多かった。一方、領家などの領主から派遣された上級荘官は預所といったが、現地の開発者が預所と呼ばれることもあった。

### 第3問 中世から近世初期までの地震とその影響

2016年度までは3年連続して近世初期までを対象とする問題が続き、2017年度は出題範囲が中世のみと変化したが、今年度は再び近世初期までを対象とするパターンに戻った。

問1 13 正解は④。

ア 平頼綱については、霜月騒動と関連づけて把握しておこう。

有力御家人安達泰盛は、得宗専制政治の傾向が顕著となるなかで、内管領平頼綱と対立するようになり、9代執権北条貞時の時代に平頼綱によって滅ぼされた(霜月騒動)。しかし、その後権勢をふるうようになった平頼綱は、1293年に北条貞時によ

て滅ぼされた（平禪門の乱）。

三浦泰村は、1247年の宝治合戦で、5代執権北条時頼に滅ぼされた有力御家人。

イ 観応の擾乱（1350～1352）についての理解が問われている。

成立当初の足利政権は、足利尊氏とその弟足利直義との二頭政治によって運営され、尊氏が武士の支配権など軍事面を、直義が裁判を中心とする行政面を担っていた。足利尊氏や執事の高師直は、畿内を中心とする所領拡大を願う新興勢力の支持を受け、荘園制を否定して新しい体制をめざす急進派だった。これに対して足利直義は、足利一門をはじめとする守護勢力の支持を受け、諸国を統治するために荘園制を前提として鎌倉幕府の体制の再建をめざす漸進派で、やがて尊氏・高師直側と対立するようになった。両派の対立は1350年に武力衝突へと発展し、高師直とその一族は翌年に直義側によって殺害された。1352年には直義が死去し、観応の擾乱は一応収束した。

問2 14 正解は①。

- ① 法勝寺は、1077年に京都白河の地（左京区岡崎）に創建された白河天皇の御願寺（天皇・皇族の発願で創建された寺院）。院政期に建てられた、法勝寺・尊勝寺（堀河天皇）・最勝寺（鳥羽天皇）など、6つの御願寺の総称を六勝寺という。
- ② 「月行事を代表とする町組が形成された」のは戦国時代（「鎌倉時代」は誤り）。戦国時代の京都では、町衆を中心とした自治的団体である町や、複数の町が集合した町組が形成された。町では町法が定められ、町や町組は町衆から選ばれた月行事によって自治的に運営された。町衆が応仁の乱後の京都の復興に尽力したことや、祇園祭を再興させたことを押さえておこう。
- ③ 『十六夜日記』などの紀行文は、鎌倉時代に書かれた（「室町時代」は誤り）。『十六夜日記』は阿仏尼の作で1280年ごろ成立したといわれている。鎌倉時代の紀行文としては、ほかに『海道記』や『東関紀行』があげられる。
- ④ 「酒屋に対する幕府の課税が始まった」のは、室町時代（「戦国時代」は誤り）。中世には、土倉や酒屋と呼ばれる高利貸業者が現れた。室町幕府は、これら土倉・酒屋を保護・統制するとともに、土倉役・酒屋役などの営業税を徴収し、経済的基盤の一つとした。なお、15世紀後半以降の戦国時代は、広義には室町時代に含まれるが、「酒屋に対する幕府の課税」はすでに14世紀に始まっているため、誤文である。

問3 15 正解は②。

I 「朝廷の監視などを目的に六波羅探題を設置した」のは、13世紀前半。

1221年、2代執権北条義時の時代に起こった承久の乱ののち、鎌倉幕府は六波羅探題をおいて、朝廷の監視や西国御家人の統轄などを担わせた。初代長官には北条泰

とき (北条義時の子)・北条時房 (義時の弟) が就任した。

III 「皇族がはじめて将軍となった」のは、13世紀半ば。

5代執権北条時頼は、5代将軍藤原(九条)頼嗣を解任して京都に送還し、1252年、後嵯峨上皇の皇子である宗尊親王を6代将軍として鎌倉に迎えた(宗尊親王をはじめとする皇族将軍は、鎌倉幕府の滅亡まで4代続いた)。

II 「皇位の継承について、両統迭立の方針を提案した」のは、14世紀前半。

鎌倉時代後期の天皇家は、後嵯峨上皇の死後、後深草天皇の流れをくむ持明院統と、後深草天皇の弟である亀山天皇の流れをくむ大覚寺統に分裂し、対立を深めた。こうしたなかで、幕府はたびたび両統の調停をおこなったが、とくによく知られているのが、14代執権北条高時の時代の1317年に行われた、幕府の提議による両統の協議(文保の和談)である。幕府の調停によって、持明院統・大覚寺統の両統が交代で皇位につく方式(両統迭立)がとられたが、皇統の分裂は14世紀には持明院統の北朝、大覚寺統の南朝へとつながり、約60年におよぶ南北朝の動乱がおこった。

問4 16 正解は②。

多くの受験生にとって、図(『大山寺縁起絵巻』)は初見のものだったと思われるが、この図を用いて田楽を問う設問は、全国統一高校生テストで出題していたため、同模試を受験していれば迷うことはなかっただろう。

- a 正文。図には、「牛に耕具を引かせた農作業の様子」が描かれている。
- b 誤文。竜骨車は、中世に中国から伝わった揚水機(揚水は図から確認できないため、誤り)。
- c 誤文。踊念仏は、鎌倉時代に時宗の開祖とされる一遍によって広められた。一遍の布教の様子を描いた絵巻物は、本問で用いられた『大山寺縁起絵巻』ではなく、『一遍上人絵伝』である。
- d 正文。図に描かれている田楽は、地方農村の労働歌舞を起源とする芸能である。田植えなどの農耕儀礼ともいわれる田楽は、農村だけの芸能にとどまらず、やがて貴族から庶民にまで熱狂的に流行した。そのことは、大江匡房の『洛陽田楽記』にみえる、永長元年(1096)の永長の大田楽などから知られる。

問5 17 正解は③。

X 誤文。中世には交通が発達し、陸上では京都周辺の馬借・車借が活躍した。海上では瀬戸内海や日本海などで港町が生まれ、それらを結ぶ廻船の往来が頻繁になった。博多・堺のほか、若狭の小浜・伊勢の大湊・摂津の兵庫などの港町が繁栄した(「港町は衰退」は誤り)。

Y 正文。富田林は、河内国（現・大阪府）に所在した一向宗（浄土真宗）寺院である興正寺の寺内町。寺内町とは、一向宗（浄土真宗）の信者が形成した町。寺内町は門前町と混同しやすいが、町域が防御のための濠などで囲まれている点が門前町と大きく異なる。

問6 18 正解は④。

- ④ 東山文化期には村田珠光が禅の思想にたつ侘茶を創出した。珠光ののち、堺の武野紹鷗が侘茶を簡素化して芸術性を高め、桃山文化期に、堺の町人千利休が大成した（「簡素さよりも豪華さをたつとぶ」は誤り）。なお、千利休のつくった茶室として、妙喜庵待庵が知られる。
- ① 室町時代に成立した語り物の浄瑠璃は、やがて三味線を伴奏楽器とし、桃山文化期には人形操りを取り入れた人形浄瑠璃へと発展した。特に元禄文化期には近松門左衛門による浄瑠璃作品（脚本）と、竹本義太夫の義太夫節が主流となった。
- ③ 濃絵とは、金碧濃彩画のこと。城郭内部の襖・壁・屏風には、金箔地に青・緑を彩色する濃絵の障壁画などが描かれた。
- ④ 堺の商人である高三隆達が節づけした小歌は隆達節とよばれ、16世紀末から流行した庶民の人気を博した。

## 第4問 近世の外交・思想・宗教

第4問での初見史料の出題は、定番となりつつある。また、空欄補充が小問2つ出題されるといったパターンも2017年度と同様だった。問2は時期判定が難しく得点差が開く問題だったと思われる。

問1 19 正解は③。

- ア 藤原惺窩は、相国寺の禅僧だったが、のちに還俗して朱子学の啓蒙に努めた。慶長の役で捕虜となり日本に連行された朝鮮の儒学者姜沆と交流をもち、大きな影響をうけた。京学派の祖とされる藤原惺窩の門人には、林羅山・松永尺五らがいる。
- 熊沢蕃山は、日本における陽明学の祖である中江藤樹の門人で、岡山藩主の池田光政に仕えた。蕃山は、著書『大学或問』で参勤交代制などを批判したため、幕府によって下総古河に幽閉され、病死した。
- イ 「鎖国」体制下の対外的な窓口は四口などと呼ばれる。四口とは、オランダ・清国との長崎口、琉球王国との薩摩口（島津氏を藩主とする薩摩藩）、朝鮮との対馬口（宗氏を藩主とする対馬藩）、蝦夷地との松前口（松前氏を藩主とする松前藩）を指し、「鎖

国」体制にあっても、異国・異域との窓口が開かれていた。そのなかでも、「対馬口」は、正式な国交のあった朝鮮との窓口として機能していただけでなく、中国大陸から文化などが流入する場でもあった。

問2 20 正解は①。

ⅡとⅢの前後関係を判断できるかがポイント。Ⅲの「西洋砲術」の演習が必要だった理由を対外的な危機と結びつけて考えれば、幕末に近い時期だと判断できたはずである。年代整序問題に対応するためにも、時代や歴史の流れ、背景や因果関係なども踏まえて学習することを重視したい。

I 「活字印刷術を用いた天草版（キリシタン版）が出版された」のは、16世紀後半。

1590年、<sup>てんしょうけんおうしせつ</sup>天正遣欧使節の帰国に際してイエズス会宣教師ヴァリニャーニによって活字印刷機がもたらされ、**桃山文化**のころ、ポルトガル系ローマ字による**天草版**（キリシタン版）が出版された。代表的なものとして、『**天草版平家物語**』や『**天草版伊曾保物語**』、日本語をポルトガル語で説明した『**日葡辞書**』があげられる。

Ⅱ 「亜欧堂田善が、西洋画の技法を用いた作品を描いた」のは、18世紀後半。

18世紀後半の<sup>ほうれき てんめい</sup>宝暦・天明期の文化の頃、<sup>ひらがげんない しぼこうかん</sup>平賀源内、<sup>しのぼずのいけず</sup>司馬江漢（銅版画の『**不忍池図**』）や<sup>あおうどうでんぜん あさまやまずびょうぶ</sup>亜欧堂田善（『**浅間山図 屏風**』）らが西洋画の技法を用いた作品を描いた。

Ⅲ 「高島秋帆に、西洋砲術の演習を行わせた」のは、19世紀前半。

幕府は、日本の砲術を洋式化する必要を説いた<sup>たかしましゅうはん</sup>高島秋帆（長崎町年寄・西洋流砲術家）を江戸に招き、1841年5月、江戸近郊の<sup>とくまるがはら</sup>武蔵徳丸ガ原（現東京都板橋区）で西洋砲術の演習を行なわせた。

問3 21 正解は③。

①③ 豊臣秀吉の朝鮮侵略により断絶した日朝関係は、徳川家康により1607年に修復された。これを受けて**対馬藩**の**宗氏**と朝鮮政府との間で**1609年**に**己酉約条**<sup>きゆうやくじょう</sup>が締結された。中世以来の形式を踏まえつつも、対馬からの**歳遣船**<sup>さいけんせん</sup>が年間20隻とされるなど、日朝間の通交量は厳しく制限され、**交易港**<sup>ふざん</sup>も**釜山**に限られた（→③）。宗氏は幕府から朝鮮との**貿易独占権**をあたえられ、対馬は耕地にめぐまれなかったため、貿易利潤が知行のかわりとなった（→①、「幕府は…日朝貿易を独占した」は誤り）。

なお、選択肢の①には「1609年」が含まれ、年代の判断を求めるものとなっているが、センター試験日本史Bでは、珍しい事例だと考えてよい。

② 朝鮮から日本へ送られた使節は**通信使**<sup>つうしんし</sup>（「謝恩使」は琉球から江戸へ派遣された使節なので誤り）。通信使は將軍の代替わりごとに朝鮮から来日した使節で、3回目までは將軍への回答と朝鮮人捕虜の返還が行われたため**回答兼刷還使**<sup>かいとうけんさつかんし</sup>と称されたが、4回目

の派遣から通信使の名称となった。1811年、11代将軍徳川家斉の治世まで、江戸時代には全12回の派遣が行われた。

- ④ 6代将軍徳川家宣・7代将軍徳川家継の時代に正徳の政治と呼ばれる政治を推進した新井白石は、1711年、朝鮮使節の接遇を簡素化し、さらに朝鮮側の国書に記載された将軍の呼称を従来の「日本国大君殿下」から「日本国王」に改めさせる措置をとった（これらの措置は徳川家宣の時代にとられたため、「徳川家綱」は誤り。なお、(1)徳川家綱が4代将軍であること、(2)8代将軍徳川吉宗の時代に待遇・将軍の呼称ともに元にもどされたこと、も確認しておこう）。

問4 22 正解は①。

ウ 江戸幕府は、キリスト教や日蓮宗不受不施派を禁じ、幕府禁制の宗教の信徒でないことを檀那寺に証明させる寺請制度を設け、宗門改めを実施した。その結果、すべての人はいずれかの寺院の檀家となることが強制された。

幕藩体制の確立にともない、宗派ごとに本山・末寺の地位を保障し、本山に末寺を統制させる本山・末寺制(本末制度)が整えられた。また、幕府は1665年に、従来の個別の寺院法度にかえて、全宗派に共通する統一法度としての諸宗寺院法度を出した。

エ 1665年、幕府は諸宗寺院法度とともに、神社神職の統制法である諸社・禰宜神主法度を出した。消去法でも選択できるが、前後からは「公家の吉田家を通じて神職が統制され」などの文が確認できるため、問題文をよく読めば選択肢を絞れたはずである。

江戸幕府は1615年に禁中並公家諸法度を定め、天皇・公家が守るべき心得などを示した。また、京都所司代に朝廷を監視させ、公家のなかから2名の武家伝奏を選んで朝幕間の連絡にあたらせた。

問5 23 正解は①。

村の盗人に対する措置に関する史料。注をよく読めば対応できる。ただし、一般的には中世で学習する自治的合議機関である寄合(史料では「寄り合い」)を想起しなければ対応しにくかったかもしれない。

X 正文。「庄屋・年寄寄り合い、山盗の穿儀これ有り候」と、(注2)の「庄屋・年寄：村役人」、「穿儀：取り調べ」から、「村役人の会合において、盗人の取り調べがなされている」は正文だと判断できる。

Y 正文。「盗み申すもの共呼び出し、(中略)しめて七人は、立木を切り申すゆえ、二里四方追放に申しつけ候」と(注5)の「二里：一里はおよそ4km」から、「立木の盗人に対し、追放刑という処分が下されている」は正文だと判断できる。

問6 24 正解は②。

- ② 「村役人が百姓の要求を領主に直訴する」のは、<sup>だいひょうおつ そがたいつき</sup>代表越訴型一揆（「村役人が百姓の要求を領主に直訴する村方騒動」は誤り）。

農民が集団で領主に政策の転換を求める行動が一揆である。17世紀前半の農民の抵抗は、村ぐるみの逃散など中世の一揆のなごりを残すものが多かった。やがて17世紀後半からは、直接訴願する越訴や一揆が禁じられていたにもかかわらず、村役人が代表して訴える<sup>だいひょうおつ</sup>代表越訴型一揆が増加した。17世紀末には多数の農民が参加して集団の力で訴願を通す<sup>こうそ</sup>強訴が起こるようになった（<sup>そうびやくしやう</sup>惣百姓一揆）。さらに19世紀、特に幕末期には、封建的な秩序の変革などを要求する<sup>せ直し</sup>世直し一揆が頻発した。

<sup>むらかたそうどう</sup>村方騒動は、(1)農民が村政参加を村役人に要求する、(2)村役人の不正を追及する、(3)小作権の確保を要求するなど、原因や要求は多様だった。このような村方騒動は、全国各地で近世全時期にみられるが、農民の階層分化が進み、村役人を兼ねる豪農と小百姓・<sup>みずのみ</sup>水呑（百姓）との間の対立が深まった18世紀後半において特に増加した。

- ① 1805年、幕府は<sup>かんとうとりしまり で やく</sup>関東取締出役を設けて治安維持に努めた。これは、勘定奉行の下に置かれ、関東8カ国を幕領・私領の区別なく巡回させるものだった。さらに1827年には、関東全域の村々を組み合わせ<sup>よせ ぼくみあい</sup>寄場組合に編成した。有力な村の名主を寄場役人とし、関東取締出役の指令のもとで、組合の村々の巡回にあたらせた。寄場組合は、関東取締出役の下部組織として機能した。
- ③ 地主や問屋商人が家内工場を設け、生産工程を単純な工程に分け、賃労働者が分業にもとづく協業を行って商品を生産する形態を、マニファクチュア（工場制手工業）という。農業から離れた奉公人などが、賃労働者として雇われた。<sup>しゅぞうぎやう</sup>酒造業に続いて、19世紀には、綿織物業（大坂周辺や尾張）、絹織物業（北関東の桐生・足利）などでもマニファクチュアが出現し、さらに幕末期には、幕府や藩直営の洋式機械工場も設立された。
- ④ 相模の農家に生まれ、<sup>てんぽう</sup>天保の飢饉で荒廃した村落を立て直すために活動した<sup>にのみやそん</sup>二宮尊徳（金次郎）については、(1)父母を亡くして苦学し、仕事に励んで大地主となったこと、(2)小田原藩など各藩に迎えられて農村復興に努めたこと、(3)天保の改革を推進した<sup>みずのただくに</sup>水野忠邦に見出されて幕臣となったこと、などが知られている。戦前期の国定教科書（修身）では、孝行・勤勉などの徳目を代表する人物として描かれたこともあり、今日でも各地の小学校の校庭などで、その銅像をみることができる。<sup>ほうとくしほう</sup>報徳仕法とは、二宮尊徳による農村復興の方策。

## 第5問 幕末から明治維新にかけての軍制改革と西洋医学

かつては、2013年度の「明治期の特許制度」・2014年度の「明治期の租税制度」のように、テーマ的に難易度の高いものが目立ったが、2015年度の「明治期の立法機関」、2016年度の「明治期の地方制度」、2017年度の「幕末から明治期の大坂（大阪）」に続き、今年度も比較的取り組みやすいテーマ（「軍制改革と西洋医学」）が取り上げられた。

問1 25 正解は②。

ア 公武合体政策をとっていた老中安藤信正あんどうのぶまさが坂下門外の変(1862)でけがを負い、老中を退いたあと、朝廷と幕府の双方と関係のあった薩摩藩しまつひさみつの島津久光しまづひさみつが幕政改革を要求した。これをうけ、文久ぶんきゅうの改革と呼ばれる政治に着手した幕府は、(1)松平慶永まつだいらよしながを政事総裁職せいじそうさいしよく、(2)徳川慶喜よしのぶを将軍後見職しょうぐんこうけんしよく、(3)会津藩主の松平容保まつだいらかたもりを京都守護職、に任命した。さらに、(4)西洋式軍制を採用する、(5)参勤交代を3年1勤として大名の在府期間を短縮する、といった措置がとられた。

1867年12月に出された王政復古おうせいふつこの<sup>大</sup>号令では、(1)徳川慶喜の大政返上および將軍職辞退の許容、(2)摂政・関白と幕府の廃絶、総裁そうさい・議定ぎじょう・参与さんよの三職さんしよくの設置、などが打ち出された。なお、王政復古の<sup>大</sup>号令が出された日の夜、小御所会議こごしょかいぎが開かれ、徳川慶喜じかんのうちに辞官納地を命じることを決定した。

イ 大名による土地・人民の朝廷への返上を意味する版籍奉還はんせきほうかんは、大久保利通おおくぼとしみち・木戸孝允きどたかよしらによって計画され、1869年正月、薩長土肥さつちやうどひの4藩主による版籍奉還の上表文に始まり、ほとんどすべての藩がこれに続いた。

政府がこれらの建白を受けた6月に、藩主は新政府の官吏かんりとして非世襲の知藩事ちはんじとなり、その任免権は政府がもち、更迭こうてつも可能となった。知藩事は従来の石高にかわる家禄かろくを支給されるようになるなど、その官僚化が進んだが、徴税・軍事の権限は藩に残存し、実質的に旧藩主の権限は温存された。しかし、旧藩主である知藩事は、治安の確保すら困難で、多くの藩では財政が逼迫ひっぱくする状態にあった。

そこで、1871年、政府は薩長土の3藩から兵1万人を東京に集めて天皇直属ごしんの御親兵ごしんべいとし、7月に天皇は在京の知藩事を召集して廃藩置県はいはんちけんを命じた。版籍奉還の藩主届出方式とは異なり、廃藩置県は勅命方式による命令であった。これにより、旧藩主である知藩事は罷免されて東京在住を命じられ、以後、中央政府から派遣される府知事・県令が地方行政にあたることとなった。

問2 26 正解は④。

- ④ 尊王攘夷論を藩論とする長州藩が朝廷を動かし、幕府に攘夷の決行をせまると、幕府はやむなく1863年の5月10日を攘夷決行の日と決定した。これをうけて長州藩は、下関海峡を通過する諸外国船を砲撃して、攘夷を実行に移した。このため、翌1864年8月、長州藩は、アメリカ・イギリス・フランス・オランダによる報復を受けた（四国艦隊下関砲撃事件、下関戦争）。この事件で攘夷の不可能を悟った長州藩は、イギリスに接近した。
- ① ペリー来航後、幕府では老中の阿部正弘のもとで、(1) 朝廷に事態を報告する、(2) 江戸湾に台場を構築する、(3) 長崎に海軍伝習所を、江戸に洋学教育機関の蕃書調所と武術訓練機関である講武所を設置する、(4) 大船建造の禁を解禁する、(5) 前水戸藩主徳川斉昭を幕政に参与させ、越前藩主松平慶永ら諸大名に对外政策を諮問する、(6) 有能な幕臣を登用する、といった政策を実施した（「幕府の独断で日米和親条約を締結した」は誤り）。その一連の改革は、安政の改革と呼ばれる。日米和親条約は、翌1854年に再来日にしたペリーとの間で締結された。
- ② 老中安藤信正は、桜田門外の変後、公武合体運動を推進し、孝明天皇の妹和宮を、14代将軍徳川家茂の妻に迎えた（「和宮が徳川慶喜に嫁いだ」は誤り）。この政略結婚は尊王攘夷派の敵視するところとなり、安藤は江戸城坂下門外で水戸脱藩士らに襲撃され（坂下門外の変）、老中の座を退いた。
- ③ 大老井伊直弼は、1858年、孝明天皇の勅許を得ずに日米修好通商条約に調印した。井伊は、1858年から翌年にかけて、無勅許調印に反発した尊攘派や将軍継嗣決定とも絡んで一橋派を弾圧した（安政の大獄）。この弾圧に憤慨した水戸脱藩士らは、1860年、登城途中の井伊を桜田門外で殺害した（桜田門外の変、「坂下門外」は誤り）。

問3 27 正解は④。

センター試験の年代整序問題は、詳細な年代を問うものはほとんどみられず、本問も論理的に考えれば正答を導ける設問となっている。江戸中・後期に西洋医学が日本で受け入れられ（→Ⅱ）、やがて外国人から医学の知識・技術を吸収するようになり（→Ⅲ）、日本の医学者による世界的業績がみられるようになった（→Ⅰ）、と段階的に理解できれば解けただろう。

Ⅱ 「緒方洪庵が大坂で適塾を聞いた」のは、19世紀前半。

蘭学者の緒方洪庵は、1838年に大坂で適々斎塾（適塾）を開き、医業とともに蘭学教育に専心した。福沢諭吉をはじめ、近代日本の建設に寄与した多くの人材を育成した。

Ⅲ 「お雇い外国人の招聘が始まった」のは、19世紀半ば。

ペリー来航後、長崎に開設された海軍伝習所では、オランダ人の軍事顧問が指導に

あたっていたように、幕末期において、すでにお雇外国人は招聘されていた。やがて明治政府のもとで積極的に招聘され、西洋文化の摂取に重要な役割を果たした。

I 「志賀潔が赤痢菌を発見した」のは、19世紀末。

北里柴三郎から細菌学を学んだ志賀潔は、1897年に赤痢菌を発見した。

問4 28 正解は①。

X 正文。Y 正文。1872年11月に出された、「人タルモノ固ヨリ心カヲ尽シ国ニ報セサルヘカラス。西人之ヲ称シテ血税ト云フ」とする徴兵告諭と、翌1873年1月の徴兵令により国民皆兵を原則とする制度がしかれ、近代的軍隊（徴兵制軍隊）の創設が図られた。しかし、徴兵制は民衆の抵抗を招き、各地で一揆が起こった（血税一揆）。

## 第6問 石橋湛山

2014年度では「漫画家手塚治虫」、2015年度では「作家林芙美子」を題材とした人物を取りあげた問題が定番となっていたが、2016年度では「オリンピック」、2017年度では「近現代の公園」がテーマとされた。今年度は人物を対象とするパターンが復活し、戦後首相に就任した石橋湛山が取り上げられた。2017年度は表の数値を判断する設問が出題されたが、今年度は比較的読みやすい史料を用いた設問がみられたのみであったため、時間に余裕のあった受験生も多かったと思われる。

問1 29 正解は①。

ア 吉野作造は、1916年、『中央公論』に「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」と題する論文を発表し、民本主義を主張して大正デモクラシーに理論的根拠を与えた。吉野作造は、デモクラシーの訳語として、主権在民を意味する「民主主義」では明治憲法に抵触するため、主権の所在を問わない「民本主義」の語を採用した。この民本主義を明治憲法の枠内で民主主義を徹底するための政治理念とし、普通選挙・政党内閣の実現などを提唱した。

京大教授だった河上肇は、「貧乏物語」を発表し、貧困の廃絶を主張した。河上肇はその後、マルクス主義経済学の紹介に努めた。

イ 『中央公論』は、前身が浄土真宗系の雑誌で、1890年代に宗門から独立した総合雑誌。主幹の滝田栲陰のもとで、とくに大正期に多くの読者を獲得し、デモクラシーの風潮を支える役割を果たした。

『明六雑誌』は、1873（明治6）年、森有礼を中心に設立された明六社によって、翌年に創刊された。『明六雑誌』は近代思想の普及・啓蒙に大きな役割を果たしたが、

1875 年の新聞紙条例・<sup>どんぼうりつ</sup> 讒謗律の発布によって廃刊となった。

問2 30 正解は③。

X 「平塚らいてうや市川房枝が、女性の地位の向上や、権利の擁護などを目的として 1920 年に結成した」のは、新婦人協会 (→ b)。

大正時代の 1920 年、平塚らいてう (明)・<sup>はる いちかわふさえ</sup> 市川房枝らによって結成された新婦人協会は、女性の社会的地位の向上をめざして、女性の政治活動を禁止した治安警察法第 5 条の「女子の政治結社・政治集会禁止」条項の撤廃運動を展開し、その一部改正に成功した。

a <sup>せきらんかい</sup> 赤瀾会は、1921 年に<sup>さくえ</sup> 山川菊栄・<sup>のえ</sup> 伊藤野枝らによって結成された女性社会主義者の団体。

Y 工場法 (→ c) は、第 2 次桂太郎内閣によって公布された労働者保護立法。少年・女性について、① 12 歳未満の就労禁止、② 就業時間の限度を 12 時間とすること、③ 深夜業を禁止すること、などを規定していた。しかし、適用範囲は 15 人以上の工場に限られ、製糸業などに 14 時間労働、紡績業に期限つきで深夜業を認めるなど不備も多く、施行も 1916 年 (第 2 次大隈重信内閣の総辞職直前) まで延期された。

d <sup>しょうぼう</sup> 商法は、1890 年、<sup>ロエスレル</sup> ロエスレルの起草によるものが公布されたが、民法と同様に法典論争を経て、1899 年に新商法が施行された。

問3 31 正解は①。

第一次世界大戦 (1914 ~ 1918) 後の民族運動の展開に関する問題。

① 民族自決を求める国際世論を背景に、1919 年 3 月 1 日、朝鮮の独立を要求する<sup>さん</sup> 三一独立運動が起こった。一方で、この運動ののち、制限付きながらも集会・結社の自由をあたえたり、民族系新聞の発行を認めたりするなどの「文化政治」が行われた。

② 日露戦争勃発後、日韓議定書や 3 次にわたる日韓協約が締結された。ハーグ密使事件を契機に締結した 1907 年 7 月の第 3 次日韓協約では、韓国の内政権を奪い、秘密協定で韓国軍隊も解散させた。元兵士などによる反日義兵運動が激化するなか、1909 年には<sup>あんじゅうこん</sup> 安重根による伊藤博文殺害事件が発生し、1910 年に韓国併合条約を締結するに至った (「第一次世界大戦後」ではないため誤り)。

③ 1926 年、中国国民党の<sup>しょうかいせき</sup> 蔣介石は中国全土の統一をめざして<sup>ほくぼつ</sup> 北伐を開始し、1927 年、南京に国民政府を樹立した (「毛沢東」は誤り)。同年 4 月に成立していた<sup>たなかぎいち</sup> 田中義一内閣 (立憲政友会) は危機感を強め、3 次にわたる<sup>さんとうしゅつべい</sup> 山東出兵を断行した。

<sup>もうたくとう</sup> 毛沢東は、中国共産党の創立に参加し、第二次世界大戦後、1949 年に中華人民共和国を建国して国家主席となった。

- ④ 中国では孫文<sup>そんぶん</sup>によって1919年に結成された中国国民党と、1921年に結成された中国共産党は、1924年に提携し、第1次国共合作が実現した。しかし、孫文が翌1925年に死去すると、そのあとを継いだ蒋介石が1927年にこれを解消し、以後、中国国民党と中国共産党は内戦を展開するようになった。

1936年、張学良<sup>ちやうがくりやう</sup>は、中国共産党討伐指導のために西安<sup>せいあん</sup>に赴いた蒋介石を監禁し、蒋介石に内戦停止・一致抗日を要求した（西安事件）。この結果、国民政府は共産党討伐を中止して内戦を停止し、翌1937年9月には、第2次国共合作が成立して抗日民族統一戦線が組織された（「西安事件をきっかけに、第1次国共合作が実現した」は誤り）。

問4 32 正解は④。

- II 「社会民主党が安部磯雄らによって結成されたが、直後に解散させられた」のは、1901年。

社会民主党<sup>しゃかいみんしゆとう</sup>は、1901年に結成された日本最初の社会主義政党。安部磯雄<sup>あべいそお</sup>・片山潜<sup>かたやません</sup>ら6人が参加した。しかし、1900年に制定された治安警察法の適用をうけ、結社2日後には結社禁止処分とされた。

- III 「共産党員が大量検挙され、労働農民党などが解散させられた」のは、「憲政の常道」期の1928年。

1928年、田中義一内閣<sup>やまもとせんじ</sup>のもとで普通選挙法による最初の総選挙が実施された結果、労働農民党の山本宣治<sup>むさしん</sup>など、計8名の無産政党员<sup>むさんせいとういん</sup>が当選した。無産政党運動や社会主義運動の高揚を危惧した田中義一内閣は、こうした事態に対して抑圧的な姿勢で臨み、(1)治安維持法を緊急勅令によって改正して最高刑を死刑とする、(2)特別高等警察（特高）を全国の道府県に拡大する、(3)2度にわたって共産主義者の大規模な検挙をおこなう（1928年の三・一五事件と翌年の四・一六事件）、などの措置をとった。1928年の三・一五事件では、田中内閣が日本共産党の影響下にあるとみなした労働農民党や日本労働組合評議会を解散させた。

- I 「河合栄治郎が、ファシズム批判を理由に休職処分となった」のは、日中戦争期の1939年。

1937年、日中戦争勃発後、反ファシズム人民戦線を組織した疑いで、日本無産党の加藤勘十<sup>かとうかんじゅう</sup>・鈴木茂三郎<sup>すずきもさぶろう</sup>らが、翌1938年には労農派の大内兵衛<sup>おおうちひょうえ</sup>や有沢広巳<sup>ありさわひろみ</sup>、美濃部亮吉<sup>みのべりやうきち</sup>らが検挙された（人民戦線事件<sup>じんみんせんせん</sup>）。日中戦争期の学問・思想の弾圧事件として、(1)『帝国主義の台湾』などで日本の植民地政策を批判した東京帝国大学教授矢内原忠雄<sup>やないはらただひこ</sup>が右翼の攻撃を受け、自発的に退職した事件（矢内原事件）、(2)東京帝国大学教授河合栄次郎<sup>かわいえいじろう</sup>が『ファシズム批判』など4著作が発禁とされ、休職処分を受け、起訴された事件、(3)早稲田大学教授津田左右吉<sup>つだそうきち</sup>の『神代史の研究』などが発禁処分とされた

事件、などがあげられる。

問5 33 正解は③。

- ③ 文化財保護法は、奈良県の法隆寺金堂壁画の焼損を機に、第二次世界大戦後の1950年に公布・施行された法令（「本土空襲に備えて」は誤り）。
- ① 戦時下では、火野葦平の『麦と兵隊』に代表される戦争文学が人気を博した。1942年には小説家らの戦争協力を目的とした日本文学報国会が結成された。
- ② 石川達三は昭和期に活躍した作家で、第一回芥川賞の受賞者（ブラジル移民を題材とした『蒼氓』で受賞）。中国戦線での取材をもとにした『生きてゐる兵隊』は、日本軍による残虐行為の描写で発禁処分となった。
- ④ 1943年に「姿三四郎」で映画監督としてデビューした黒澤明は、戦後、1951年のベネチア映画祭において「羅生門」でグランプリを受賞するなど、日本映画の名声を世界に高めた。

問6 34 正解は②。

- X 正文。軍部大臣現役武官制とは、軍部大臣（陸・海軍大臣）の任用資格を現役大将・中将に限定するもの。1900年、第2次山県有朋内閣のもとで定められ、大正政変を経て成立した第1次山本権兵衛内閣のときに現役規定が削除された（退役した大将・中将の任用も可能とされた）。
- Y 誤文。昭和期に入り、1936年、二・二六事件直後に組閣した広田弘毅内閣のもとで、軍部大臣現役武官制は復活した（「五・一五事件」は誤り）。その後軍部大臣現役武官制は、広田弘毅内閣退陣後に組閣の大命をうけた宇垣一成の組閣阻止（陸相を推薦せず）や、米内光政内閣を退陣させる際（畑俊六陸相辞職後、陸相を推薦せず）に、陸軍によって利用された。

## 【参考】 五・一五事件と二・二六事件

五・一五事件は、1932年5月15日、海軍の青年将校らが首相官邸を襲撃し、犬養毅首相（立憲政友会）を暗殺したテロ事件である。元老の西園寺公望は、穏健派で前朝鮮総督・海軍大将の斎藤実を後継の首相に推薦した。拳国一致内閣が成立し、加藤高明護憲三派内閣以来、8年にわたって続いた「憲政の常道」と呼ばれる政党内閣の時代が終焉を迎えた。

二・二六事件は、1936年2月26日に発生したクーデタである。北一輝の思想的影響を受けた陸軍皇道派の青年将校たちが、約1400名の兵士を率いて首相官邸・警視庁などを襲撃した。さらに、高橋是清蔵相・斎藤実内相・渡辺錠太郎陸軍教

育総監らを殺害して、首都中枢部を4日間にわたって占拠した。これに対し、昭和天皇はクーデタを容認せず、戒厳令かいげんれいが出されるなか、青年将校らは反乱軍として鎮圧された。

この事件の結果、統制派が陸軍内における主導権を確立した。陸軍は、岡田啓介おか だ けい内閣にかわって成立した広田弘毅内閣ひろ た こう きの組閣に干渉するとともに、軍部大臣現役武官制えき ぶ かんせいの復活を広田内閣に認めさせた。

問7 35 正解は③。

2017年度は第5問で大久保利通おおく ぼ としみちを対象として設問が出題されたが、本問では吉田茂よし だ しげるに関する説明文の正誤判断が求められている。著名な政治家については、情報を整理しておきたい。

③ アメリカが日本の早期独立を画策したこともあって、1951年9月に講和会議が開かれ、日本は48カ国とサンフランシスコ平和条約を締結した。平和条約と同時に日米安全保障条約も結ばれ、両条約は翌1952年4月に発効し、日本は独立国としての主権を回復した。講和については、ソ連や中国も含めた全交戦国との全面講和を主張する動きもあったが、第3次吉田茂内閣の意向を反映して、西側陣営を中心とした国々との単独講和となった。

① 「保守合同によって結成された自由民主党の初代総裁となった」のは、鳩山一郎はとやまいちろう。

1954年、鳩山一郎は日本民主党を与党として組閣し、憲法改正・再軍備を訴えた。これをうけてサンフランシスコ平和条約や日米安全保障条約をめぐる左右両派に分裂していた日本社会党が、憲法改正を阻止するために再統一を果たすと(委員長は鈴木茂三郎すずき もさぶろう)、革新陣営の勢力拡大を危惧した鳩山一郎は、自由党(総裁緒方竹虎おがたたけとら)との提携を模索した。その結果、1955年に自由党と日本民主党の保守合同が実現し、自由民主党が成立した。第1・2次鳩山内閣の与党は日本民主党であるが、保守合同を経て成立した第3次鳩山内閣の与党は自由民主党であることに注意したい。

② 「日本社会党を中心とする連立政権の首相となった」のは、片山哲かたやまてつ。

1947年4月、戦後2度目の選挙(日本国憲法公布後はじめての総選挙)では、労働運動の高まりを背景に、日本自由党が敗れ、野党の日本社会党が第一党となり、5月に新憲法施行後最初の内閣として片山哲内閣が誕生した(第一党の日本社会党が過半数をとれなかったため、民主党・国民協同党との3党連立で組閣)。しかし、連立内閣のため積極的な社会主義政策を実行できず、社会党内左右両派の対立が原因で、翌年2月に内閣は退陣した。

なお、ほかに日本社会党の議員が首相になった例としては、村山富市むらやまとみちが挙げられる。1994年、日本社会党委員長の村山富市を首相とする、日本社会党・自由民主党・新党

さきがけによる3党連立内閣が成立した。このとき、日本社会党は安全保障などに対する党の基本路線を大幅に変更した。

- ④ 「降伏文書に調印した」のは、<sup>しげみつまもる</sup>重光葵。

外交官の重光葵は、1945年9月2日、東京湾内のアメリカ軍艦ミズーリ号上で、政府代表として降伏文書に署名した（軍部代表は<sup>うめづよしじろう</sup>梅津美治郎）。極東国際軍事裁判では禁固7年の刑をうけたが、仮釈放を経て1952年に公職追放を解除され、改進黨の総裁となった。のち、鳩山一郎内閣の外相として、日ソ国交回復などに尽力した。

問8 36 正解は①。

- a 正文。b 誤文。「中国との国交の打開をも速やかに実現すべきである」、「向こうから頭を下げてくるまで待とうとするような態度が、はたして健康な外交であろうか」から、「日本政府の外交姿勢に疑問を呈している」（→a）は正文、「日本政府の外交姿勢を高く評価している」（→b）は誤文、だと判断できる。
- c 正文。d 誤文。この文書が書かれた当時にあたる1960年、中華民国と平和条約を結んでおり（→c）、中華人民共和国と平和条約を結んでいなかった（→d、「すでに中華人民共和国と平和条約を結んでいた」は誤り）。

1951年、サンフランシスコ講和会議には、中華人民共和国および中華民国は両方も招請されなかったが、日本はアメリカの意向を受けて、1952年、台湾の中華民国と<sup>にっかへいわ</sup>日華平和条約を締結した。

しかし、その後アメリカのニクソン政権は、泥沼化したベトナム戦争を終結させるために中華人民共和国との関係を改善しようとした。1971年、ニクソン大統領は北京訪問計画を発表し、翌年に訪中して米中の敵対関係を終了させた。ニクソン大統領の訪中計画を事前に知らされていなかった日本政府（佐藤栄作内閣）は、大きな衝撃を受けた（ニクソン＝ショック）。こうしたなかで、1972年9月、<sup>たなかかくえい</sup>田中角栄首相が訪中して日中共同声明を発表し、日中国交正常化が実現した。日本は中華人民共和国を「中国で唯一の合法政府」と認めため、日華平和条約は廃棄された。これにより、中華民国との外交関係は断絶したが、日本と台湾は民間レベルでは密接な関係を維持している。